共同討論（6）

大衆斗争路線

自信をもってたたかおう

本所支部にて

共同討論は過去五回、各支部をまわりながらたくさんの方々に参加をしていただきながらつづけてきました。今回は本所支部の方々に、大衆斗争路線をどう考えるかを中心に話し合ってもらいました。共同討論のシリーズは「応じれないまま」ではおわり、今後はいろいろな問題を時期に応じてとらえながら座談会などを企画してゆきたいと思います。（編集部）

他力から自力へ

われわれの中にはよく、「こういう問題があるが執行部はどうしてくれるのか」とか、「方針が出ないからたたかえない」などという風潮があるし、われわれ自身もついそんな風にながれやすい。われわれの中にあるそのような欠陥は、

(1) 指令には従うが、自分自身で斗うのはにがて
(2) 自分達はそうきらんから指令や指示に従うだけ
(3) 組合で団体行動をする給合はきちんと出来るが個人的生活はでたらめ

などとなってあらわれている。このようなことは、自分のたたかいを本当に自分自身のものとせずに執行部に自分の苦しさやまよいを責任転化する態度のあらわれである。

執行部と組合員

同時に、大衆斗争路線は、執行部や活動家にとっては指導上の指針である。

現在まで、執行部は組合員のはくせんしたり、指導方針を出してきたきらいがあった。すなわち、そのときそのときの問題につて、より十分な大衆討議の機会をその組織的保証がなかったし、それを作り出そうということ（大衆伝達）も大衆斗争路線の大切な一つであるとも。

このようなことから、

(1) 自分達のたたかいとそ力だ
(2) 執行部は自分達のたたかいとその中での問題点をとらえることが主要な任務であり、われわれは執行部に依存しないのだという組織に対する組合員の見方をかえてゆくことが大切である。

とくに、このような態度が、苦しさからにげだすために、斗いを放棄することにも通じるのだ。

このようなわれわれの構えそのものをその前向きに、党部に依存するのではなく、あくまでも自分たち自身の斗いのみが本当の力であるということをみんなで自覚し、自力で斗いを組み上げてゆこうとするのが、大衆斗争路線の基本をなすものであろう。

防衛から反撃へ

五人組の任務

五人組の課題にしても、当初は会社側の差別、組織分断からどうわれわれ自身をまもってゆくのかということが主な任務であったが今後の方向としては、当然、五人組を中心に、自分の職場に即応した柔なんな、具体的な戦術を全員で討議し、反撃に、個々の条件にたいしたがって転化してゆくことが主要な任務となってくる。

たとえば、残業拒否という戦術にしても、さまざまな条件の異なる職場で、残業の性格やその価値が異なってくる。そこで、残業拒否といっても、画一的に拒否するのではなく、その戦術の本当の意味を生かすことにはならないだろう。

また、従来からある五人組の任務として、五人組会議で、個々人の「まよい」を話し合うということも当然ある。

笹林公園で行れた婦人大集会

「退転する」という組合員に対して、その五人組会議で、たしかに低賃金で苦しいが、やめてもいまより賃金のいい仕事があるかどうか、具体的に話し合った結果、そんなものはなかなかないということがはっきりし、退転思いとどまって共に斗うようになったという例もある。

資本の側がマス・コミを動員してあおり立てる退転ムードにも、このようにしてこそ対決出来るのである。

自信をもって斗いつづけよう

われわれのたたかいはたしかにくるしく、長いが、ほがしい合理化攻げきは、第二組合の内部にまで波を激化させている。われわれの斗い自体が、第二組合員の内部に唯一の希望となってきつつあることは実際われわれの日頃の実感である。

分裂させられた他の組合は、自分の力を統一の条件を作り出すまでは六、七年もかかっている。われわれも自信をもって、ただたかいつづけよう。

物価値上反対婦人大集会

大牟田母子協議会主催の物価値上反対大牟田婦人大集会は一〇月二二日午後二時から笹林公園音楽堂に約二、〇〇〇名の婦人を集めて行われた。

大会は議長団選出のあと、大地評、社会党、共産党、民主商工会代表、日本婦人会議議長田中寿美子さんらのメッセージがあり、その後、物価問題について、完全給食について、保育所問題について失対打切りについて、それぞれ意見発表があり、大会を終った。

終了後、全員で上官通りをデモ行進し、物価問題を市民にアピールした。

なお、当日は午前中、第三組合の主婦も労働会館ホールで物価値上反対の集会を開いた。

川柳会が発足

去る一〇月二七日夜、原田社宅畑田栄さん宅で、三池労組川柳会（仮称）が発足した。

川柳会は斗争前はさかんに行われていたが、その後下火となり、今回平野破笠、中村五酔さんらを中心に新らしく川柳会が作られた。川柳会では、全三池労組の有志に参加してもらうことを望んでいる。なお、句会としてつきの人々を役員にした。

代表平野破笠、記録畑田栄、句会係大中美風

一一月句会は一七日（日）六時から組合本部で行われる。題は「はくせん」「うで」「好き」

多数の参加を希望

人生の再起へ政府そっぽ向く　五酔

スタートへ腕がどきどと冬父母の　席佳久

かあちゃんは手がつかめぬ明どはん　和平

かあちゃんに云う父ちゃんは云う父金がない　破笠

かあちゃんに寝込まれて知る野菜の値　栄

かあちゃん自目に二本目を遠慮する　夏子

一日の報告夜食に混ぜて食べる　雲泡

定時制の子を待つあたたかい夜食　美風

秋の山を探る

宮浦支部　高　椋　龍　生

※　※　※

子どもの背中で踊っているバッグには、二人分のサンドイッチ、牛乳、それに菓子類と極酎一合セットが詰っている。

去年までは交替で運んだが、今年は一人でかついだ。

子どもの成長と後ろ姿に驚ろくと同時に、心ひきつりながら自問した。どこに力がはいってくる。

両方からぢち寒がれた藪みちを抜けると、ぽっかりと明るい天の一角がのぞく。

○天高し斗かう命ある限り

去年の政治斗争時に読んだ一句が頭の中をかすめる。

そして、

○世に八方塞がりはなし天高し

と、吾も吾の今の心に満足し、自信をさらに深めるのである。

※　※　※

天地のあるうんの中の一呼吸、一呼吸は紫帯らしく、山の清気が五体に浸みるとき、生かされている感恩の心が天に向い、地に向って限りなく湧く。

極力に配されず、雄大な自然とともに自由を愛し、自然のままの自由を守り、自由に生きることのきびしさと、よろこびを落葉の音に聞き入りながら、つくずく思う。

天にも地にもかえがたい、この一刻、無から有を感ずるこの喜びは自然には、不自然な技巧や差別支配はない。ただ自由に、あるがままにあるのみである。

天人ともに許さざるものへの抵抗が、ふっふっとして秋の山気の中に興（おこ）る。

○落葉ふむ父と子の足音を聞く

足音は、子どもの長いこれからの人生につながる足音であり、苦難と喜びに結び合っていく足音でもある。

いつの日か子どもが、労働者として真面目に成人したとき、きっと、この父をしのび父をたづねがしがり、父の苦労をかみしめながらきょうのように山に来て、ひとり落葉をふみめることであろう。

その足音は、未来を掘り起す道へつながっている。

人間が人間を大切にする未来の道へつながっている。

※　※　※

秋の山は、私にかぎりない思索をなげかけてくれる。

（一九六三・一〇・五）

第九回地評大会の中から

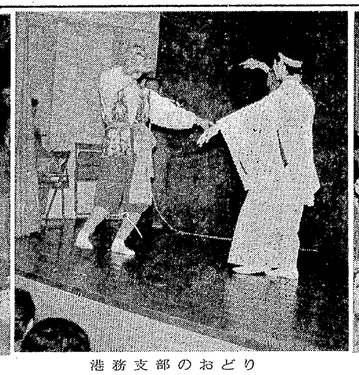
宮浦　上　村　唯　夫

六四年度運動方針・原水禁の斗いの項目で、全自労の仲間の修正案を含めて、ここにもまた二つの意見が現れきされました。「世界大会発足当時の基本を尊重し……」と主張する人びとも、「まず平和の敵を明らかにし……」という人びとも、「まず平和の敵を明らかにし……」とそれぞれ運動の目的はただひとつ、平和への願いが秘められていたと考えます。

この問題をここに再びそなえるわけではありませんが、大会の議題として考えてみますならば、私たち（特に系統的な説明をうけない一般の）現場組合員の、核実験に対するうけとり方としては、まず核爆弾は「人殺しを目的としたもの」であること、その実験は戦争誘発のおそれがあること、そしてビキニ的副産物もあること などすべて尊い生命にかかわりのあることを本能的に察知しています。そしてそれら核実験反対の叫び声となり、「平和を守れ」の偉大な運動と発展するものと考えます。

究極的な目的である「戦争防止」のためには、ある程度の犠牲はやむを得ないとはいえ「ヒロシ

よろこぶおじいちゃんおばあちゃん


港務支部のおどり

宮浦支部の喜劇

長生きしてよかつたばい

―敬老会ひらかる―

○一主婦会主催の敬老会は去る一一日、二二日の両日、船小屋温泉センターで二日間を荒尾地区、大牟田地区に分けて行われた。

ゆっくりとテコに入って、中食の後、各支部から、それぞれとっておきの芸が披露され、一日中、温泉センターの大広間は始手と笑いにうずまった。

○一約五〇〇名近くのお年寄りを接待する主婦会員は、一日中、こまいだったが参加したお年寄りの「長生きしてよかったば（もず）が鳴ってふと見上げると、大牟田の町が秋晴れの下にくっきりと描き出されて絵のようである。

架（わた）とぼ種をとぼして萩日和

草のわたが、ポカリと雷に浮いたかと思うと、スーツと風にのって流れ、足元をじゃれ蝶がせかせかと飛び出したりする。

山は、男萩花（おとこべし）女郎花（おみなべし）、竜、野菊などが咲き、山茶茶の実がぱっくきはじめて、秋晴を美しく浮き彫りにして見せる。

秋の山はかかに、きびしく、なつかしく人間の心に話しかけてくる。

父のこと秋はいかめし
母のこと秋はなつかし
家持た処に
啄木のこんな歌がふと頭に浮ぶ。

会の役員が冷水をぶっかけるという「寝耳に水」ならぬ「寝足に水」というこ幕もあった。

○一主婦会各支部の、それぞれ趣向をこらした出演には、観客のおじいちゃん、おばあちゃんから、しば し喝りやまず拍手がおくられた。たたかう三池主婦会の一面をいかんなく発揮した一日でもあった。

私は組合掲示板

宮浦　伊牟田　瑞　恵

暑い夏の盛り、私に緑の咲をおとしてくれた桜も、いまではすっかり落葉して、細い枝さきにとぼけた花が三つ三つ、白くかさく咲いている。

ここは集団住宅の中心部で、これよりさきは長い坂道にさしかかる。自転車の人も必ら ず私の前で平走おりて、押しあげる。会社通勤の人、買いもの主婦、学生など、人通りはかなり多い。また遠路手事の失対の人びとも、木陰で一服しながら私のビラを読んでくれる。まさに掲示板としての立地条件は満点の場所である。そのため、私を真ん中にして三本の掲示板が立っている。

さて、隣の掲示板をちょっとのぞいてみよう。

断末魔のお知らせ、予防注射（これは実際とはたぶん時間が過ぎていた）までは よいとして、なにやらこまごまと古い広告用書なるものが貼ってあるが、最後の文句がぶっそうだ。

「社宅の秩序を乱す。就業規則にてらし厳罰たる処置をとる……」

とがなんとか……。いったい誰に対する警告やら。秩序乱れるおそれありと思うのは組合の勝手だが、そのような原因をつくりだしているのは果してどなたさまかといえばなる。たまには大幅賃金引き上げ、ボーナス五万円支給なんて書いたら、すこしは誠意欲が湧くものを……。

「昔の「納屋時代」のあの威圧的な世話方御度の復活か、思想弾圧時代の逆行を思わせる。いやな感じがいっぱいの、このごろの会社掲示板である。

もう一本の掲示板はまだ新しい。酒類料や旅行売り渡しあのおいしい。だが所有者に文句もいえず、新しい丈夫な身体をもちあまし、大きなアクセをして、退屈そうにつっ立っている。まるで脱落記念碑みたいな掲示板もまたあわれなり。

三つの掲示板も三人三様、みなそれぞれ生業方も違っているが、あの激しかった三百十三日の斗い、全労仂者対資本家の必死の斗いをすべている時、私の胸にも絶えまなくビラが貼られた。

そしてその時の情意やユニースは、今でも、三池の斗いのあしあとと、さまざまな思い出と共に労仂者の心の奥深く残っているとどろう。

就労後、やがて三年を迎えんとする現在も、三井鉱山残務整理まで言われる第二次合理化、幹部の責任追及に対し、人間として、労仂者として生活と擁和を守るため苦しくとも頑張り続けている。

が、この斗いのきびしさは、活字になっ ても、いまはマジック書きの情意となって私に貼りつけられ、道行く人々に訴え、仂く者の自覚と認識の上に立った団結をいっそう強め広く仲間の理解と協力を深めている。その横顔をちょっと自己紹介してみよう。

就労後、すでに四十三名にのぼる尊い犠牲者を出す。組員は一斉に二百人の時限ストに突入。主婦会は黙せずし て掲示板に抗議のビラを貼る。そのビラはマジックで書いてお組織なものではあるが、「……夫たちの睡眠にどんなに気をつかい、いかに笑顔で送り出しても、それだけでは夫たちの生命は保障されない事を充分考えよう。私たちは水筒一杯を任事に送り出すことは、もっこめんだ！……」と、生産第一、保安無視の会社に対しからの憤りを込めた抗議のビラに、第二の婦人も、しば し立ち止って読んでいく。

その裏側を考えさにし、やはり炭鉱に仂く者の妻としての共通の願いが感じられる。

また、楽しい、おしゃれもいっぱいだ。地域の家族ぐるみ ドッジボール、クリエイション、ソフトボール大会、おじいちゃん、おばあちゃんが、心待ちの敬老会のお知らせ。それからの組合の巡回映画のポスター、看板屋も頑負けするよう な地域のHさんの腕で見事に出来上る。そしてその きれいなポスターを胸につけた私は少々得意顔だ。

幼い子供達が「まんが、シネマスコープ」と、読める字とけ読んで「ワーイ映画があるぜい」と欲声あげて駆けはじて行った。

而瞬間の掲示板がうらやましくなる程 しいこの頃ではあるが、それだけに掲示板としての生甲斐を感じている。

このようにして、もう幾年月、三つの掲示板では私が一番古いが雨にうたれ風にさらされて、つっ立っているその間、私の身体も力尽きて、倒れそうになった時、地域分会の人たちが、みんなで力を合せ、私の腐れかけた両脚の手術をし、新しい柱と取り替えたりも夫たち支えをしてもらったこともあった。また、折角、貼ったビラが いたずらな風にとばされそうになった時、しっかりと縛づけてくれたやさしい主婦会の人々。

私はほんとに幸せ者だ。

秋も深まりかけて寒い冬がやってくるが、何にも貼りつけてない私が寒空につっ立っている姿は、わびしいものである。

何はともあれ私は組合掲示板である。

頼もしい三組織の仲間の皆さんやさしく明るい主婦会の皆さん、斗いの担い手の一人として私の掲示板としての役目が十分発揮できるよう、うんとうんと利用して下さいね。

そして仂く者みんなが幸せになるる日を強くため、しっかり大地に足をつけ、頑張り抜きましょう。

終

たたかいつづける王子製紙の仲間たち

総評弁護団　藤　本　正

昭和三三年暮から冬にかけて、王子の労仂者と労仂協約改悪――組合つぶし――と対決し、一五五日の斗いを斗い抜きました。王子春日井工場（名古屋近郊）には、沢山の仲間もチルグとして斗いに参加しました。

それから五年。王子労組春日井支部をおとずれた私は、千二百数十名の労仂の中から優かに六〇名になった第一組合の労仂者の、すばらしい斗いに感動しました。

激しい差別の攻撃と、労仂強化――合理化――が深まっていますが三池だけではありません。ここでも、生産は二倍になり労仂者は増加しません。公傷になっても、三池と同じくなかなか休めない。

珉倒が毎日のように、まだ退院できないかと文句をつけてくる。肩の骨にヒビが入り腕をつって出てこなければならない、第二組合の労仂者は、斗い抜きました。

差別も三池のように、昇給で差別し、第一組合の組長は平従業員におとされ、あらゆる差別を受けなければ、生産は流れ作業なので、おちれば百万円プラスするといわれたこもいます。

しかし、問題はここからです。

次の名の第一組合員は長い間、苦しい思いをしたうえに、全王子労働者の斗いのために、今斗いを展開しています。地域の中小企業労仂者との共斗、平和斗争などと活発に斗い抜くなかで、労仂者へ真の統一の方向を見出し、斗っています。

抄造部門、八〇名のうち一〇名の労仂者は、二週間に一回の割で珉場のカベ新聞をすでに二〇号出しました。一人の労仂者が何よりも実践をと、閉をかけず短い時間で、民主的新聞を中心に、ハサミで切り抜きメリではって最につくりました。参加する仲間がふえたし、珉場中心のニュースに最近では変ってきました。新労の労仂者も面白く読んでいるといいます。

他のA珉場も、（名を秘す）わかが方は僅か一割の数名ですが、月一回のガリ版珉場新聞出しています。第一組合員を分析して良心的な者をよりわけ、会員が各人を分担して手渡しています。

仕上げという字の珉場でも、生理休暇や産休という女子労仂者の法律上当然の権利をとったことを理由に、一時金からの三名の目数を差引くという会社提案があったが、第二組合員を含めてその反対の意思を感ずるすばらしさ。第二組合が会社提案にのるや、第二組員中の反動派以外の労仂者に往復ハガキでアンケートをとり、二割の回答を集めました。そのなかには ガンバッテくれという返事もありました。

この労仂者の要求を統一して斗う姿勢は、やはり、王子労組が全王子の労仂者のための組合であることを真に思想的に意思統一することからはじまりました。二年前賀斗の際に第二組合員を含めて生計調査をやることから斗いがはじまりました。

そしてその斗いは広がっています。巻の地方選挙では、一人の労仂者が、新労員の数名を選べひきいれ新労だけで二千数票あつめた実践、女子労仂者の新労員を矢ぎく含めて既所開設の要求貫名をとった斗争、九・一平和集会で一万数千内の新労員も大きく含めて東めた実践など、いくらでもあります。

王子の労仂者はいいました。「王子の労仂者は学習をした。現況をいうようになった。しかしそれではだめだ。まず実践しようと昨年から決意したのだ」と。

三池の皆さんが斗っているように、全国の仲間の多くが、分裂させられ、いためつけられているなかで真の労仂者の統一のたたかいっています。そして三池に大きたものを期待しています。王子の組合は自分が苦しいのに「三池を守る会」をつくり、王子労組の斗いと結合した守る会の総活を派遣パンフレットとして出しています。

労仂者の真の統一、珉場での斗い、全国の仲間の階級的連帯が必要だと、つくづく感じました。

（春日井の宿で、63、10、3）

多数の参加を希望